
桜海祭実行委員会！

木内奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜海祭実行委員会！

【Nコード】

N4563T

【作者名】

木内奏

【あらすじ】

補欠合格で入った憧れの大学。期待に胸を膨らませ、入学して。超絶イケメンな二人の先輩に勧誘されて入ったのは、桜海祭実行委員会。

大嫌いなあいつや親友の友里恵も含めたたくさんの個性的な仲間達と桜海祭を作り上げていくのはなかなか難しい！？

紆余曲折の学園ラブコメディ！

第一話

青い空に桜のピンクがよく栄える、そんな春。

私は無事に第一志望の大学に入学した。

都心から少し離れた場所にある、広く美しいキャンパス。私が憧れ続けていた大学。

そんな大学に通うことが出来て、私は身も心も今までにないくらい軽かった。

担任の先生や親にも無理だと言われ続け、記念受験よね、受けに行くだけでも嬉しいわ。

そんな風に思っていた、全国でもランクの高い位置にあるこの大学に、私は補欠合格で合格したのだ。

合格通知が届いた時、私は封筒の送り先と宛先を確認し、通知書に書かれている名前と大学を確認し、そしてもう一度封筒を見て……
ようやく歓喜の声を上げた。

『お母さーん!!!受かった!受かったよっ!』

それが、今から一ヶ月程前。

晴れて入学し、数日が経ち。

大方(ここ、大事。全部じゃないのよ。)のことが上手くいき、私は楽しいキャンパスライフを送っていた。

「サークル、どこに入る？」

一通り授業が終わり、いくつものサークルがブースを構えている広場を歩きながら、私が聞くと私の親友の三田友里恵はうん、と首を傾げた。

「まだ、わからないけど…綾子ちゃんは？」

小首を傾げる仕草も妙に似合ってしまっ、私と正反対の女の子らしくかわいらしい友里恵は私を挟んで反対側にいる鳥居綾子を見た。

「絶対バスケ部。」

短く簡潔に綾子は言った。

「バスケ、好きだねえ。」

ショートカットが似合う、スラリと背の高い綾子は中学の頃からずっとバスケを続けていて、バスケが強いという理由でこの大学に入学した。

「当たり前。で？華音は？」

「私？まだわかんない……でも、思いっきり楽しめるのがいいな！」

だって、せっかくの大学生活。楽しまなきゃ損だよ！思いっきり遊んで、バイトして、サークルして、たま〜に勉強して、毎日楽しく過ごせるなんて、大学でしか出来ないもの…！

「大学、楽しみたいの？」

「それならばぜひ、俺達と一緒に活動しないかい？」

突如、頭上から聞こえてきた声に私は顔を上げる。

そして、固まった。

イ、イケメン！超イケメン……！

如何にも女の子受けしそうなモデルのような整った顔立ちに、さらにと無駄に輝かしい笑顔を讃えた背の高い男の人と。

同じ背が高く、いかにもスポーツやってます！というような外見をしていながらもきれいな顔立ちをした爽やかでカッコいい男の人。思わず頬を緩めて見とれてしまいそうなその二人を見て、私は動け

なくなった。

私の両脇にいる友里恵と綾子も驚いたように、滅多に出会えないくらい IKE MEN レベルの二人を見ている。

いち早く正気に戻ったのは綾子で。そして二人に尋ねた。

「何のサークルなんですか？」

すると、二人は再びニツコリと笑った。眩しいくらいの笑顔で。

「桜海祭の実行委員会だよ。」

「おうみ…さい？」

私の容量の少ない頭の中を必死に掻き回してその単語を探す。

確か…… 桜海祭って、うちの大学の文化祭、だよな？

「うん、そう。桜海祭。どう？興味ない？」

「君達みたいなかawaii子達が入ってくれたら僕達も嬉しいんだけどな。」

「は、入ります！」

魅惑的な微笑みでそう言われてしまえば、私に断る理由はない。と、言うより断れない。IKE MEN にそんなことを言われたら。

「じゃ、詳しくはこの紙に書いてあるから、ぜひ来てみてね。」

私達三人にビラを渡すと、微笑みながら二人は人混みの中に戻って行こうとする。

「あのっ…！」

ようやくと放心状態から抜けた私は去って行く二人の背中に思わず声をかけてしまった。

『何？』というように振り返った二人に尋ねた。

「お名前…！名前はなんておっしゃるんですか！？」

なんだかよくわからない話し方をする私に苦笑いをしている綾子の視線を感じるが、気にしない。

「僕が真鍋彰で。」

モデルのように整った方が言い、続いて、

「俺が小山田慧。」

スポーツ系の爽やかな方が言う。

よろしくね、なんて言いながら人混みに紛れて行く二人を見て、私は頬を緩ませた。

かつこいい……！

入学早々、こんな素敵な先輩に会えるなんて、超ラッキー！

って、思ってたんだけど。

良くも悪くもこの時から、私の運命は変わったんじゃないだろうか。そんな風に思っただのは、まだ先の話。

第二話

「華音つて、ほんと単純だね。」

あのイケメン二人組——真鍋彰先輩と小山田慧先輩に声を掛けられた翌日の放課後。

私は友里恵と、付き添うただけだからね！と言った綾子と指定された教室に向かっていた。

「うるさい！いいのよ単純でも！思い立ったら即行動なのよ！」
「ぼやく綾子に私は言い返す。」

「だってあんなイケメン、テレビ以外で見たことないし！お近づきになってみたいと思うのが乙女の心情でしょ！」

「はいはい…まったく、華音のメンクイも困ったもんだ。」

「あはは、でも、華音ちゃんらしいじゃない。」

「ま、そーだけどさ。」

「イケメンならば、それでいいの！何だって許されるわ！あいつ以外ならね！」

そう力説すると、友里恵が不思議そうな顔をした。

「あいつつて…？」

「ほら、前話した奴。入学早々華音と……」

「ああ、あの人ね。」

私の代わりに綾子が答えた。

私と綾子は経済学部経済学科なのにに対し、友里恵は文学部日本文学科。あの日のあの出来事を見ていない。まあ、その日の帰り道、イライラMAXの私がその事を話したから知ってはいるけれども。

「あーっ！思い出したらまた腹立ってきた！」

怒りでフツフツし始めた頭を冷ますように私は歩くスピードを上げた。

指定された教室はキャンパスの比較的端にある特別棟の三階、T302教室。数年前に造られたばかりなので、他の校舎よりも外観も内装もとてもきれいだ。

この特別棟は授業で使われることもあるけど、大抵の教室はサークルの部室として分け与えられていた筈。

怒りのあまり、スタスタと早足で歩いていた私は予定よりも早く教室に着いてしまった。

「かのちゃん…早い…」

「うちはともかく、友里恵のこともつと考えて歩きなよ。」

後からやってきた友里恵と綾子にそう言われた。六年以上、バスケットをやり続けている綾子は息をあげる様子は微塵もないけど、ずっと文化部の友里恵は呼吸が荒い。

「う…ごめん。」

と、私は素直に謝った。

うん、でも早足で歩いたお陰でだいぶ落ち着いたかも。

教室を確認した後、私達はドアを開けた。

「…こんにちは…」

挨拶をしながら入ると、扉から割と近くにいた例のイケメン二人組が私達に気づき、近付いて来た。

「やあ、来てくれたんだね、嬉しいよ！」

にこやかに笑いながら真鍋先輩が手を差し出して来る。そして私の手を取ると、ギュツと握って上下に軽く振る。

私…もうこの手を洗えない……！

「絶対に、来てくれると思ってたんだ。どうぞ、こっちに来て座りなよ。」

そう言つて小山田先輩は手近な椅子を三つ引き、私達を促した。

「三人共、名前は？」

ありがたく椅子に座った私達に小山田先輩は聞く。

「け、経済学部経済学科一年の島村華音です！」

「同じく一年の鳥居綾子です。」

「文学部日本文学科一年の三田友里恵です。」

「華音ちゃんに綾子ちゃんに友里恵ちゃん、ね。」

「ここではみんな、名前で呼ぶから、僕らのことも彰先輩、慧先輩でいいよ。」

マジですか！いきなりファーストネームで呼んだり呼ばれたりしちやっていいんですか！？

「華音、うるさい。」

「…何も言ってないわよ。」

「心の声が聞こえてきた。」

あなたはエスパーですか、綾子さん…

「どのくらい、一年生は入部するんですか？」

友里恵が聞くと、彰先輩はピンと右手の人差し指を立てた。

「15人。減りもしないし、増えもしないよ、決定事項だからね。」

意味深な言い方をする彰先輩から、慧先輩に私は視線を移した。

「あはは、彰の言っていることは、後でわかるから大丈夫だよ。それよりも、他の一年生とコミュニケーションでもとろうか？」

慧先輩は教室の中央に固まっている、三、四人の男子達を見た。どうやらあれは一年生らしい。

そっちを見た私は、一つの後ろ姿を見て固まった。

もしかしなくても…あれは……

視線に気づいてこちらを見たその顔を見て、私は息を呑んだ。

きれいな茶色の艶やかな髪に、人目を惹きつけるような澄んだ目。

そして、絶対に女子に人気であろう、甘いマスク——

彰先輩達と同レベルのイケメンのそいつも私を見て固まり…

私と同時に、同じように相手を指して、叫んだ。

「「あーーーーっ！！！」」

私が今最も嫌いな相手…櫻井幸也。

なんでこいつがここにいるのよ！有り得ない！

「なんであんたがここにいるのよ！」

「それはこっちのセリフだ！」

睨み合う私と櫻井幸也を見比べて彰先輩は問う。

「華音ちゃんと幸也…知り合い？」

「全然！」

「赤の他人スよ！」

相変わらず腹の立つ表情、態度、物言い！せっかく頭冷やしたのに……！

また、あの日の出来事が頭に蘇る――

第三話

私が櫻井幸也に出会ったのは、入学式の時。

『新人生代表。経済学部経済学科、櫻井幸也。』

はい、と返事をして壇上に上がって来た人を見て、私はその姿に目が釘付けになった。

「ちよっ！友里恵、綾子！見て！あの人！超かっこいい！」

興奮した私は両脇に座る二人の膝を叩く。

痛みに少し顔をしかめた綾子は私の手をどかし、私と同じように壇上の人物を見た。

「ま、確かに華音好みというか、女に人気ありそうな顔だね。」

実際、私と同じように彼に熱い眼差しを送っていた人はたくさんいたはずだ。

けれど。

イケメンで、かつ頭もいらしい櫻井幸也と同じクラスになれる。

そう思ってたドキドキしていた心はあっさり崩れてしまった。

入学式後、明日以降の予定等の連絡をするために学科ごとにそれぞれの教室に入る。

出席番号順に席は指定されていて、『島村』と『櫻井』だから、私とあいつの席は近くて。やった、ラッキー！なんて思っていた。けど。

携帯をいじりながら片手でペン回しをしていたら、手が滑ってシャーペンが床に転がり落ちてしまった。

それと同じタイミングに櫻井幸也は誰か友達の所に行こうとしたのか、立ち上がり、私の席の横の通路を横切った。

カッーン、という音と共に、櫻井幸也の靴に当たったシャーペンは遠くの方まで飛ぶ。

あ。という顔をお互いにしていたと思う。

もしかこれが彼とのファーストコンタクト！？とか思い、いろいろ妄想がスタートした私だったけど、あいつが次にした行動に一気に血が頭に登った。

「ああ、悪い。」

私の方を見もせずに、あいつはそのまま歩き出す。

「ちよつと待ったあ！あんたそれが人のシャーペンを蹴っ飛ばした後の態度！？普通、拾って来て、『ごめんなさい』っつーのが筋でしょ！？」

そこで初めて私の顔を見た。その瞬間、僅かに動揺のためか瞳が揺れた気がする。

「んだよ、いきなり！謝っただろ？」

「はあ！？あれが謝った態度！？あーあ、あんたのこれまでの人生が見えるようね！」

「お前こそ何なんだよ！初対面の相手に向かって言いたい放題言いやがって！」

「あんたが悪いんでしょ！？」

クラス中が静まり返る中、私達は睨み合う。

周りの視線を気にしているような余裕はない。とにかく腹が立った。数秒後、私達はお互いから視線を逸らした。

あれで新入生代表とか！信じらんない！頭いいからって！イケメンだからって！

何でも許されるなんて大間違いなんだから！

そして私は今も櫻井幸也を睨みつけている。いつまで経っても腹は立つ。

「なるほどね、そんなことが……。」

綾子に的確かつ簡潔に、あの事件の内容を説明してもらった彰先輩

は私と櫻井幸也を見比べた。

「さしずめ、『運命の出会い』ってどこかな？」

「どこがですか……」

きれいにハモってしまい、私達は顔を歪め、目を逸らす。

あれが運命の出会いとか冗談じゃない！彰先輩ってば……

どちらかと言うと、私が彰先輩と慧先輩と出会った方を運命だと思いたい。

うん、あれは絶対運命よ！

でも……実行委員で櫻井幸也と一緒にするのは気に入らない……なんでこいつがいるのよ。私のキラキラキャンパスライフ（笑）を返して欲しい。

「……でもな……櫻井幸也がいるからって、辞めるのは癪だしな……あいつが辞めてくれるのが一番いい「華音、声漏れてる。」んだけど……えっ、ウソ……」

いつの間にか、考えていることを口に出していたらしく、私は慌てて口を塞いだが、時は既に遅く。

櫻井幸也の額に青筋が増えていた。

「ほんつと……お前は腹立つ！そのセリフそっくりそのまま返す！どうせならお前が辞めろ！」

「はあ！？絶対やだし！」

売り言葉に買い言葉。

でもム力つくんだから、仕方ない！

「まあまあ、二人共落ち着けよ。」

「二人に辞められたら、困るよ？どっちもうちの実行委員会には必要なんだから。」

慧先輩と彰先輩にそう言われたら、何も言えない。『はい！』とい子に返事した私を見て、櫻井幸也は舌打ちをしていたが、気にしないことにする。

櫻井幸也本人も、先輩二人に言われたら、もう何も言い返せないらしく、大人しく席についた。

「さて、これで一年生は全員かな？」

いつの間にか、人数が先ほどよりも増えていた。けれど、彰先輩と慧先輩以外に、先輩らしき人はいない。

くると全体を見回した後、先輩達は私の前——教壇の上に立った。

第四話

「うん、15人全員いるね。じゃあ話を始めようか。」

「あの、他の先輩方はいないんですか？」

「年生15人と彰先輩と慧先輩以外ない教室を見て、私は聞いた。

「今日は僕と慧と一年生だけだよ。他の人達は今日はお休み。」

「つこりと彰先輩は笑って言った。相変わらず、惚れ惚れするような素敵な笑顔だ。」

「まず、僕達の誘いを断らずにここに来て、うちの実行委員会に入ってくれてどうもありがとう。」

「毎年、うちはこのサークル勧誘期間中にも、他のサークルと違ってブースを出していないんだ。」

「じゃあ、どのようにして勧誘をしているのか、だけど。みんなにした通りさ。毎年、委員長・副委員長が一定の条件を設けて、新入生を勧誘してるんだ。」

「で、選ばれたのが君達ってわけだ。」

彰先輩と慧先輩は交互に流れるように話す。

「やっぱイケメンが並ぶと絵になるなあ……なんてぼんやり考えていた私は、二人以外の声が耳に入ってきて、我にかえった。」

「一定の条件ってなんですか？」

声の方に顔を向けると、少しふくらした女の子が片方の頬を少し膨らましながらか先輩達の事を見ていた。

「飴……舐めてるのかな？」

「そう思って女の子の手元に目を落とすと案の定、机の上に飴の袋がある。そればかりではなく、チョコやらクッキーやらの袋も。」

「それはまだ内緒。多分そのうちわかるよ。」

そのお菓子少女（名前わからない）に答えながら彰先輩は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

一定の条件ねえ…確かに気になるけど。

頭のレベルじゃないと思う。だって補欠合格の私と、推薦で入った友里恵や余裕で合格した綾子と一緒にだから。あと不本意だけど新入生代表もいるし。

顔のレベルでもないだろうし。私の顔はかなり普通だ。かわいいなんてお情け程度にしか言われたことがない。比較対象は…虚しくなるからあげるのを止めておく。

だとしたら、何だろう？みんな学科も学部もバラバラだろうし、住んでる地域も違うだろうし……

って、私の頭で考えたってきつとわからないわよね。私がわかったら、他の人達はもっと簡単にわかるはずだし。

そう思い、私は再び先輩達を見た。

「詳しい説明は追って説明することにして」

「あの、すみません。」

突然、私の隣に座っていた綾子が彰先輩を遮って声を発する。

「どうしたの、綾子ちゃん？」

「私、付き添いで来たんでここに入るつもりないんですけど。それに、入りたいサークル、他にありますし。」

相変わらず物事をはっきり言うな、綾子は。先輩に対しても発言に躊躇いがない。

「それは困るな。君にはいてもらわなくちゃならないよ？僕達実行委員に君は必要だ。」

「その入りたいサークルとうち、掛け持ちでも全然構わないけど。」

「や、掛け持ちとか両立大変なんで。」

綾子のきっぱりした口調に少し考えるような仕草をした後、彰先輩と慧先輩は顔を見合わせ、頷き合う。

「じゃあ、こういうのはどうだい？綾子ちゃんがここに入るならこのチケットを僕からプレゼントするっていうのは。」

どこからともなく、彰先輩は一枚のチケットを取り出し、綾子に渡す。

綾子と共に私もそれを覗き込む。

「…昼の学食フリーパス（一年間有効）…？」

「これは去年の桜海祭のミスターコンの優勝者に渡された副賞なんだけど、他の人に譲渡も可能なんだ。まあ、有効期限は今年の文化祭の前日までなんだけど。」

随分豪華な副賞だな…。ん？副賞ってことは…

「彰先輩、去年のミスターコン、優勝したんですか！？」

「そつだよ。」

につこり優雅に笑って彰先輩は言う。

……先輩のイケメン具合なら、確かにあり得る。ってかこの大学に彰先輩以上のイケメンの先輩はいない気がする…。から当たり前か。唯一張れるとしたら慧先輩かな。

「これ、くれるんですか？」

「うん、あげるよ。綾子ちゃんが入ってくれるならね？」

「掛け持ちになるんで、毎回出れるとは限らないですよ？」

「全然構わないよ。」

綾子は数秒逡巡したように見えただけ、その後にしつかり彰先輩の目を見て言う。

「わかりました、入ります。」

「じゃあ今日からそのチケットは君の物だね。」

満足そうに彰先輩は笑った。綾子は綾子でチケットを眺めて嬉しそうな顔をしている。

まだまだ食べ盛りで伸び盛りらしい綾子は感心するほどよく食べる。鞆にパンが二、三個入っているのが通常装備。

だから学食のタダ券、というのは非常にありがたいのかもしれない。まあ私でも飛びついたかもしれないけど。ちょっぴり羨ましい。多分、教室にいる殆どの人がそう思っただろう。

「他のみんなも入るってことで、いいんだよね？」

慧先輩が確認するために問うと綾子を除く全員が頷いた。

「それじゃ、話を戻そうか。詳しい活動内容や今年の桜海祭につい

ては後日実行委員が全員が集まった時に説明するよ。今日は一年生同士、自己紹介をしようか。」

「まずは俺達からするべきじゃないか？」

慧先輩は横に立つ彰先輩に視線を向けた。

「それもそうだね。僕は文学部国際文学科三年で、桜海祭実行委員長の真鍋彰。好きなことは女の子を「えーと、俺は小山田慧。理工学部生物学科で、桜海祭実行委員会副委員長をやってる。わからないことがあったら、どんどん俺達に聞いていいからね。」

慧先輩に話を遮られて彰先輩は不満そうな顔をしている。

「かわいい。とか思ってたら、また綾子に苦笑いをされた。」

でも、女の子――の後、なんて言おうとしてたんだろ？

「慧。」

「そんな顔をするな。お前の趣味は言わなくてもそのうちわかるだろ？今ここで言って、微妙な空気にする気か？」

「……それもそうだね。」

ますます気になるんですけど…

と、私達は全員思ったに違いないが、誰もそれを口に出さない。

「じゃ、次は一年生ね。」

「名前と学部学科と何か一言。」

彰先輩と慧先輩はそう言って、教室の隅の席に座る。傍観するだけ、ということらしい。

誰からいくのだろう、というような空気が漂う中で、端の方に座っていた男子が立ち上がった。

第五話

立ち上がったその男子は先ほどまで彰先輩達が立っていた前に行く。さほど目立つ容姿ではないけど、育ちが良さそう…なんか、いいとこのお坊ちゃん。そんな感じ。

「俺から、始めるね。えーと、経済学部経営学科の名塚拓海です。あまり役には立たないかもしれませんが、頑張ります。じゃあ、次の人。」

名塚君（名前で呼ばなきゃだから拓海君かな…）は名塚君が座っていた席の後ろに座る人を見た。

えっ！超かわいい！

色素の薄い色をしたサラサラの髪に、パツチリ大きい目に、女子顔負けな整った顔…の男子。

私より絶対かわいい！

かわいい男子は私のターゲット外だけどこわいい！

テンションの上がる私を見て、友里恵と綾子は顔を見合わせてるけど気にしない。

「理工学部機械工業学科の指原湊です。よろしくね。」

ニッコリ笑うその顔は、思わず彼の性別を忘れてしまいそうな程。湊君と代わって、今度は女子が立つ。

艶のある黒髪で顎の辺りで綺麗に切りそろえているおかつぱ頭。だけれど妙にそれが似合ってる。

日本人形みたいな感じ。

「望月美由紀です。文学部史学科です。趣味っていうのとも違うけどイケメンが並んでるとテンション上がりますv！」

私と同じイケメン好き？

いや、この言葉の裏には何かありそうな気がするけど……

「木藤潤、理工学部化学学科です。このサークルには大して興味は

ありませんでしたが、先輩方に強引に誘われたのと、何かを企画してそれを実行するというプロセスは僕の今後にとっても役に立つと思っただけで入ることにしました、よろしく。」

私の思考は木藤潤のせいで遮られた。

それはいい。それはいいんだけど、なんかこいつ腹立つ！なんか偉そう何だけど！？

櫻井幸也とはまた別の腹立たしさ…！

「んーと、桐谷芽依です♪家政学部 of 食物栄養科です。早くみんなと仲良くなれたらいいなっと思っています！」

やっと普通の人のターンに戻った…と思いきや、最後のにつこりは明らかに櫻井幸也に対するもの。

趣味が悪い…。

櫻井幸也はいえはその視線は前に立つ芽依に注がれず、窓の外に向けられていた。

が、ふっとこちらを見たので思わず目が合ってしまった、慌てて私は前を向く。

「高山郁恵です。学部も学科も芽依と同じです。よろしく」

「千葉愛美です！私も二人と同じ学部学科です！好きなのはジャニーズです」

今時、と評するのが一番な茶髪でメイクバッチリな二人が芽依に続いて自己紹介をしたらした。

「平川真子です。社会学部の福祉学科です。お願いしま〜す。」

のんびりと、先程のお菓子少女が言う。やっと名前がわかった。次に立ち上がったのは、いかにも気の弱そうな細身の男の子。

「せ、瀬川…陽太、です。文学部日本文学科です…よ、よろしくお願い、します。」

こちらの方が大丈夫なのかと心配になるようないで立ち…。

ほんとに大丈夫かな…

「経済学部経済学科の山辺武です。頑張るんで、よろしく。」

確かこの人、櫻井幸也とよく一緒にいる…でも、櫻井幸也よりず

つと性格の良さそうな人だ。

「武と同じ、経済学部経済学科の櫻井幸也です。」

櫻井幸也が前に立った時、空気が変わった気がした。

オーラがある。人を引きつける。まるで、彰先輩のような。

その証拠に、今まで教室のあちらこちらを見ていた人達も櫻井幸也に視線を注いでいる。

私の周り、半径一メートルはまた違った意味で空気が変わったけど。なんかやっぱり腹立つわ！理由なんてないけど！

悔しいほど、イケメンすぎる。顔だけなら私の中ではドストライクけどっ！やっぱり性格って大事よね！

「高校の頃から先輩に誘われてたんで、入ってみました。これから、よろしく。」

うん、愛想もあまりないね。彰先輩みたいな悩殺級の笑顔でなくても、普通そこならはにかみ笑いくらい浮かべるでしょう。

いろいろ文句を付けながらブツブツ心の中で言っていたら、綾子に肩を叩かれた。

「次、華音だよ。」

「え！？あ、うん。」

いつの間にか綾子と友里恵も自己紹介を終えたらしく、私は慌てて前に出る。

「経済学部経済学科の島村華音です。難しい方の『はな』に『おと』で『かのん』です。一生懸命やるんでお願いしま〜す！」

華音って名前：気に入ってはいるんだけど、どうも私の外見にマッチしてない。

なんてことは今はいいか。

最後に残った一人は、櫻井幸也とはまた違った意味でオーラがあった。

いや、オーラというよりは威圧感？

短髪のお金髪に吊り目で、目つきが悪くて耳にいくつもピアスつけてて。

チャラいんじゃない、怖い。

「長田貴広。理工学部建築学科。」

それだけ言っと、さっさと席に着いてしまった。やる気がないのか、なんなのか。

でも、こういう実行委員会に入ろうとするなら、もしかしたら見た目ほど悪い人じゃない…かもしれない。

けど、私達のほとんどの人は少し恐れる物を見る目で彼を見ていた。

「よし、じゃあこれで自己紹介は終わりだね。」

不安な空気の中、彰先輩はにっこりと微笑んで立ち上がった。

やっぱり、先輩を見ると目が落ちて着く。

「今日はここまでにして。明後日に新入生歓迎会があるから、五限終わったらこの特別棟の前に集合してね。じゃ、解散！」

第六話

「あゝ行きたいけど行きたくない…」

新歓の日。

五限までの授業を終えた私と綾子は友里恵と落ち合つて、特別棟に向かつていた。

「何その矛盾したセリフ。」

相変わらずクールな調子で綾子は私を見た。

「だつてさゝ新歓には、行きたいよ？ すごくね。彰先輩や慧先輩に会えるんだし。でも……わざわざ櫻井幸也のいるところに行きたくない！」

「そんなに幸也君のこと嫌なの？」

「だつていちいち腹が立つんだもん！」

私が口を尖らせると、綾子は呆れた顔をした。

「私に言わせれば、どっちもどちな気がするけどね。華音も結構幸也につつかかつてるとこあるし。」

「別にそんなことないわよ！」

私がぶーたれ、友里恵と綾子がなだめ、苦笑いをしながら歩いていると、特別棟の前に着いた。

「あつ！ 華音ちゃん達！ 来た来た。」

彰先輩が私達に気がついて笑顔で手を振った。

ああやつぱり彰先輩の笑顔を見るだけで元気になれる…！

目が癒やされた私は途端に元気になって先輩に近づく。

「こんにちは！ もう全員来ちゃいましたか？」

「いや、まだ二、三年の何人かが来てないよ。」

「二、三年生つて何人いるんですか？」

友里恵が聞くと彰先輩は一瞬思い出すように視線を上にあげ、そして戻した。

「二年生が15人、三年生が12人だったと思うよ。」

「思うって…適当ですね…」

綾子がそう言うのと彰先輩は苦笑した。

「来る人はよく来るんだけど、来ない人は全然来ないからね。でも多分、今日は全員揃うんじゃないかな。」

「そんなもんなんですか？」

「あはは、学園祭終わったらとりあえず暇だからね、僕達は。その後はまあなんとなく来年の学園祭のこと話しあたりするくらいだから。」

そうこうしているうちに、全員が集まったのか、慧先輩が彰先輩に近づいてきた。

「彰、全員来た。行くだろ？」

「そうだね。よし、みんな移動するよー！僕達に着いて来てね。」
につこり笑って彰先輩はみんなに呼びかけ、先頭をきって歩いて行く。

一クラス分くらいの人数でそろそろ歩く様はちょっと一目を引くのでは、と思ったけど、大学のサークルじゃ当たり前みたいで、道を歩いててもあまりそれを気にする人はいない。

まあ、すれ違う女の人みんな彰先輩達を見てたけど。

大学の最寄り駅付近にある居酒屋に、私達は入った。和風な内装で、店内の棚には盆栽があり、壁には墨絵が掛かっていた。

案内された座敷に着くと、彰先輩はバッグの中から二つ、袋を取り出した。

「席はくじ引きだよ。一年生はこっち引いて、二、三年はこっちの袋から引いてね。」

そう言って、袋を差し出され、私達は順番に引いていく。

「えーと、それじゃ、引いた番号の席に着いてね。席のところには番号書いた紙が置いてあるから。」

私は、と手元の四つ織りにされている紙を広げると2番、と書いてある。

「綾子と友里恵、何番？」

「22番。」

「私は31番だよ。」

うわ、二人とかなり遠い……大丈夫かな、私。いや、人見知りはいない方だからいいんだけど。

二番、と書かれた紙の置かれた席はその部屋の一番角の方。

そこに行き、先に私の目の前に座っていた人物を見て、私は声を上げた。

「なんであんたがここの席なのよ！」

「それはこっちのセリフだ！」

櫻井幸也は不機嫌そうにそう返した。

信じらんない……せつかくの楽しい新歓だつていうのにこいつが目の前にいるなんて……！

「まあまあ華音ちゃんも幸也も落ち着いて。」

「彰先輩！」

そう言つて彰先輩は櫻井幸也の隣に腰を降ろした。

「彰さん……席、ここなんスか！」

「うん、3番だよ。なるべく一年生の間には二、三年が入るようにしてあるんだ。」

腹立つのが半分、嬉しいのが半分だな……これは。彰先輩が近くにいろのは非常に嬉しい……けど。

はあ、と私は小さく溜め息をついた。

「あーきら先輩！早速一年生と絡んでるんですか？」

元気のいい、女の先輩が私の隣に座ってきた。

「沙織ちゃん、4番？」

「そーですよ。あ、私、笹沼沙織！二年の副代表やってます」
微笑んで、気さくに話しかけてきてくれた先輩に私も自然と笑みがこぼれる。

「あ、私、島村華音です。」

「華音ちゃんか〜かわいい名前だねえ。そっちのイケメン君は？」
「櫻井幸也です。よろしく願いします。」

ぺこりと頭を下げて言う。

何よ、先輩には礼儀正しいんじゃない！嫌な奴ね！ほんとに！

「よし、みんな席に着いたね？自己紹介はもう少ししてからするとして…とりあえず、乾杯しようか？」

ヒューっと、いくつかの口笛が鳴らされる。

「新しく入ってきてくれた、一年生のみんな。これからよろしくね。二、三年生はどんどん一年生に絡んであげてね。それじゃあ……カンパ〜！」

「カンパ〜！」

部屋の至るところからコップが掲げられる。

私のコップの中身は一応、一年生だからってことで烏龍茶。

「華音ちゃんって、どこ住んでるの？」

「埼玉県の〇〇市です。」

沙織先輩は私のお皿にサラダを取り分けながら、聞いてきた。

「あれ？幸也も埼玉だよね？」

彰先輩に聞かれ、櫻井幸也は頷いた。

「〇〇市の隣の××市です。」

「へー、じゃあ二人とも方向同じなんだ〜。え、行き帰りとか会ったりしないの？」

「しません。」

即答で、しかも同時に答える。

「ちよつとハモンないでよ！」

「はあ！？知るかよ！お前がハモってきたんだろ！？」

睨み合う私達の前に、スツと手が伸びてきた。

「ダメだよ二人とも。せつかくの新歓なんだから、ね？」

につこりとやはり魅力的に彰先輩は微笑む。

ま、確かにそうだね…ここで櫻井幸也に苛立っても仕方ない。

彰先輩もいることだし。

「沙織先輩はどこから通ってるんですか？」

「ん？神奈川の方だよ。彰先輩は都内でしたっけ？」

「うん、そうそう。あと、幸也とは高校も一緒。」

「え！？そうなんですか！？」

「緑川高校つてどこ、知ってる？」

「知ってますよ！私の学校の姉妹校ですもん！」

そう、私は緑川女子高校出身。で、緑川高校は男子校だ。

こんなイケメンの方が姉妹校にいたなんて知らなかった…あー先輩は東京だから、私と路線が逆方向なのか…。

しばらくわいわいやったあと、定番の自己紹介。

ぶっちゃけ、先輩の名前とか聞いてもすぐ覚えられない。だからとりあえず、この前会った一年生の顔と名前を一致させようと頑張った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563t/>

桜海祭実行委員会！

2011年10月8日23時24分発行